
星の海のカリオペ

レイ@名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の海のカリオペ

【Nコード】

N6109E

【作者名】

レイ@名無し

【あらすじ】

2008年【七夕小説企画『星に願いを』】参加作品 地球から遙か二万六千光年の彼方に私はやってきた。ただ、愛する妻に逢うためだけに。

(前書き)

七夕小説企画『星に願いを』参加作品です。

「七夕小説企画」または「星に願いを」で検索すると、他の参加作家さんの多様な作品をお楽しみいただけます。

公式サイトは各頁の下部のバナーから。

地球西暦三〇〇〇年も近い、その年に。

私はついに地球から見て射手座の方向にある、銀河の中心に近い「射手座A」へ到達しようとしていた。

人類が思い描く数ある冒険夢の一つ、それはブラックホールへの旅。

幾度も我々地球人類は挑んできた。

大航海時代を髣髴ほうぶつとさせる、不屈の精神を持つ先人達が開いた、

銀河のあらゆる航跡を辿って、我々は来たのだ。

光を呑み込む奈落の底の、そのまた先へ。

人類は実に偉大だ。

人類の尽きない好奇心を満たすために、文明を築き上げ、そして地球をも飛び出して、いまや神の世界を肉眼で視れるのかもしれないのだ。

光り輝くガスが円盤状に渦を巻く様は、既にこの世の美しさではない。

渦の中心はプラズマで覆われており、ブラックホールの姿は見えない。

その強烈な光の中から電子や陽子が噴出して、ジェットと呼ばれる神の光の腕を、遙か数百万光年も先に伸ばしている。

その神の腕に、今にも奈落に落ちそうに揺れている星、囚われの身で逃れられない星、激しいエネルギーの対流の中に産声を上げた星、まるで無関心に居座っている星、様々な星々がブラックホールの周囲で賑わっていた。

私は、その光景を実に楽しく見ることが出来て満足だった。

「ごらん。むこうで星がダンスをしている。地球からはゆっくりとしか見えないし、地球時間で二万六千光年も経たないと、今

「見てる光景は届かないんだよ。不思議だね」

後ろに居る人影に気付くと、手招きして呼び寄せる。

『お呼びですか、リュウイチロウ』

すこし機械的な音声で背中中に投げかけられた。

「なんだね、ひと時も見逃しちゃうならんよ。さあ、ここに来て。」

カリオペ

そう言っただけで彼が引いた手は、これもやはり機械的な感触が否めないものだった。

『私はそのような情緒性を備えてはおりませんが』

遠慮がちにリュウイチロウを見やった。

「いいんだよ。二度と見れないのかもしれないのだから。カリオペ、この神の世界に居合わせた幸福を共有しよう。この喜びは君とでないとダメなんだ」

その腰を引き寄せて、モニターの前に立たせた。

カリオペは、しばしその神々しい光景を眺めて、リュウイチロウの背中に手を当てる。

『リュウイチロウ、あなたと共に数々の宇宙を見てきましたが、私のようなアンドロイドでも、この世界は驚嘆すべきものと考えます。その仕草は、まるで彼の恋人のようである。』

ヤニ・リュウイチロウは満足げに、女性型アンドロイドへ微笑みかけた。

アンドロイド・カリオペは少し沈黙したが、やがて多少の陰を含んだ声で言う。

『リュウイチロウ。奥様もこの世界を御覧になったのですね』

「……そうだね。彼女も……カリオペも、この絶景を見ることが出来る幸せだっただろう」

幸せでなくては困る。

リュウイチロウは、モニターの脇に置いた手に力をこめた。

ここが、彼女の墓標。

ここに散ったはずの、彼女の命はきつと今ここに漂っているのか

もしれない。

私は此処に、還って来たのだ。

カリオペ。

私のカリオペ。

リュウイチロウは、彼の妻カリオペの美しい面影を胸に、神聖な雰囲気浸っている。

アンドロイド・カリオペは、その様子を見守っていたが、チカチカと光る呼び出しに応じるためそつと彼の傍を離れた。

『御用でしょうか』

「ヤニ・リュウイチロウ博士はいらっしゃいますか」

『もうすつと、ここに』

かすかな風切り音を出してドアが両脇へスライドして開き、士官が一人が現れる。

「 出発の準備が出来ました」

アンドロイド・カリオペに敬礼すると、視線はリュウイチロウを探す。

部屋の明かりを暗めにして、モニターの前から離れようとしないうリュウイチロウは、体の向きを変えて士官を見やる。

「ここに来てから地球時間で一ヶ月近くになるんだが、随分と手間がかかりすぎなかったかね」

「博士の仰る事は勿論なのですが」

さあ、と促す士官に伴われて、アンドロイド・カリオペも艦長に挨拶しにブリッジに行く事にした。

なぜなら、この作戦はアンドロイド・カリオペも欠かせないものだからだ。

「目の前に居る妻にも会えないなんて、ずいぶんな仕打ちだったよ」
肩をすくめて皮肉を投げる。

船はブラックホール周辺の恒星を回る惑星に着陸し、エネルギー・

シールドの幕に覆われて、ブラックホールの凄まじい磁気嵐や放射線の雨から守られている。

モニターや実際の窓には、電子などがそれぞれにぶつかって生じる、極彩色のオーロラが眩しく差し込んでくるために、だいぶ暗めのシェードが下ろされていた。

人工の光よりは百倍も美しいのに。

そうは思っても、リュウイチロウは口にはしなかった。

「……ご気分はいかがですか」

艦長が最初にご機嫌を伺ってきた。

嫌味でもないのです、特に、とそっけなく答えて艦長の次の言を待った。

「いよいよ、人類初のブラックホール突入ですが、出発の前にお渡ししたいものが」

そう言つて艦長が軽く手を振ると、傍らの士官が花束を差し出した。

「……これは何かね」

「失礼ながら、奥様に花の手向けを」

嬉しいとも、哀しいとも、どの表情もせずにリュウイチロウはそれを受け取った。

「この荒々しい神の世界に、花はあまりに哀れだな……」

果てしなく「永い」とされる「時間」の中で、花は一瞬に過ぎない

「はかない生」を象徴している。それでも、花は咲くというのに。

「ありがとうございます。妻も喜ぶだろう」

艦長の顔に少しだけ安堵したものがよぎった。

「それから……ヤニ提督、我々は弁解するわけではありませんが、奥様は事故でした」

「提督はやめたまえ。私は今回、一介の研究者として搭乗しているにすぎない。それに、妻の事は事故だとは思っているよ。出発前に気分を害したくは無い。それ以上は無用だ」

艦長は恐縮して姿勢を正した。

「失礼を致しました。どうかご無事で帰還されることを」
「なに、人類は偉大だ。私が失敗しても後から誰かが続く事だろうよ」

死を覚悟してなのか、それとも人生は諦観で生きてきたのか、それとも妻の死が彼をそうさせているのか、いとも軽く言つてのけた。「地球の衛星“月”に降り立った、かのアームストロング船長の気分を味わえるのは私くらいかな　　じゃあ、行ってくるよ」

提督としての身分ならば、もっと大勢の見送りを受けたであろうが、中年の一人の科学者としては、ブリッジ乗員と艦長ら十数人の精一杯の敬礼を背に、当てる無の旅へと一歩踏み出したのである。巨大な艦船の下部に格納されている、探査船にはすでに二人の科学者、そして操船などを担当する士官が二人乗り込んで、リュウイチロウとアンドロイド・カリオペを待っていた。

この作戦は、地球人類の一大プロジェクトであり、そしてあまりに無謀な冒険である。

ブラックホールが理論どおりに、そしてそれ以上の結果が出たならば、彼は地球史に永遠に名を残すだろう。或いは、新しく発見された何かの単位名として語り継がれるはずだ。

地球連邦軍の協力を得て大船団を率い、その未知の世界への入り口まで来た。

但し、コレは少なくとも三度目の派遣となる。

一度目は、いま駐留しているところよりももっと遠くで引き返した。

二度目は、今居るところと同程度の接近を試みている。

しかし、二度目の派遣隊は二度と地球の青い姿を見ることが出来なかった。

その第二次派遣隊にいたのが、ヤニ・リュウイチロウの妻で科学者のカリオペが同行していたのだ。

（私は待ち焦がれていたが……カリオペ、君はどうだったのか？私を待っていてくれるのか？）

これは彼女の甲いではない。
手元の花束で、露に濡れる深紅の花びらを一枚、指に取る。
それから、そのまま探査船の窓に貼り付けた。
まるで愛おしい妻の唇のように。

「動力は正常です。シールドへの供給は安定しており、射出と同時に次元空間遮断。重力制御が計算どおりであれば、途中で振り切り引き返すことも可能です」

オペレーターがリュウイチロウに報告し、船長になったリュウイチロウは頷いた。

万が一を考えて、かれらクルーは全員が独身である。ほぼ捨て身の覚悟ではあるが、人間のあらゆる全てをはるかに凌駕する神の世界に、多少の度を越した緊張感は禁じえない。

「カリオペ、準備はいいか」

女性型アンドロイドは、慣れた様子で小首を傾げた。

外見は全くのロボットであるのに、なぜかアイカメラの奥で異様な光が走る。

「母船との通信を断続的次元交信に切替える。母船と同期合わせ」
探査船下の床に一条の光が線を引いたかと思うと、大きく左右に割れて口を開け始めた。

激しく眩いオーロラが艦内に侵入しようとして、シールドに遮断されていた。

一ヶ月ほども此処に駐留し、この嵐の隙が出来るタイミングのデータを取ってはいたが、なにせ気まぐれな神のことである。

最も安全な一瞬を試験的に算出してダミー船を射出したり、無人船を放り込んだりはした。

しかし今度は、やり直しのきかない生身の人間を送り込むのだ。
これが失敗したら、地球は大きなダメージを受けるだろう。

「三……二……一、射出！」

重力制御されている中、発進に掛かるGは無い。スムーズに急降下したかと思うと、すぐに直角に前方へターンした。

巨大な母船があつと言う間に後方に見える。

駐留する惑星の上空へ到達すると、一度滞空して様子を観察する。あいつも変わらず、言葉を絶する世界。

あまりに巨大なために、遠くても円盤状の渦巻くガスはすぐ足元に感じた。

円盤の中心から延びてその先が遠すぎて見えないジェットは、止め処ない畏怖を植えつける。

「どうか？」

「順調です。この磁気嵐がもう少し弱まったら突入します」

時間が来たようだ。

リュウイチロウはシートから立ち上がると、「カリオペ」と読んだ。

アンドロイド・カリオペは胸部からクリスタル・キューブを取り出すと、傍らのコンソールに置いてデータを読み込ませた。

猛烈に荒れ狂うプラズマのカーテンは、これから起こる事を予兆するように禍々しい。

キューブのデータが読み込まれて一分経ったか、経たないか

突如、眼下に駐留する船団や、艦隊のあちこちから火が噴出した。

一部は完全に吹き飛び、一部は動力炉が停止したためシールドが解除され、致死量以上の放射線を浴びて沈黙した。

探査船のオペレーターが気付いて悲鳴を上げる。

「艦隊が！」

生きて帰れるかどうかも分からないのに、僅かな帰還の望みが足元で失われていくのだ。

文字通り宇宙のゴミとなって中空に漂い、力なく、大した存在でも無いようにブラックホールの方向へと流されていく。

そここうするうちに、ついに母船からも火が吹き始めた。

船体のどこかちょっとでも亀裂が走ったり、シールドが欠けたり

すると、もう望みはどこにも残っていない。
そしてどの船からも脱出する小型船は確認できなかった。
壊滅。

あつと言つ間が出来事だった。

「ヤ二提督。我々は、生存の見込みが無くなりました」
生還する可能性を振り切つて、半ば涙声で科学者の一人が叫ぶと、
リュウイチロウを振り返つてまた悲鳴を上げた。

「提督！ どうしたんですか！」

静かに佇むその手元には銃が握られている。

「どうもこうも、こういふことなのだよ」

操舵のオペレーターを除いて三人、彼に絶望の原因を問いかけた。

「あの船団もですか？」

「冗談じゃありませんよ！ 我々はどうしたらよいのです！」

蒼白になつて唇を振るわせる。

「……そう。船団の破壊も、これから起こることも全部私が仕組んだ事だ。それも私がこの第三次派遣隊に志願したときからね」

ゆつくりと笑顔で溜息を吐くと、彼らに座るよう合図をした。

アンドロイド・カリオペが前に出て威圧する。

「第二次派遣隊に同行した妻が、ここで事故に遭い二度と地球に帰つてこなかった。その弔い……とても云おうか」

「何と言つ横暴な！ 身勝手すぎる！」

口々にリュウイチロウを責めた。

半ば、八つ当たりに罵倒するものもある。

「よかろう 諸君らは何故、私の妻カリオペがそうなったか知つているのか？ 知らんだろうな。私は軍人で科学者だから、双方の思惑や事情を知る立場にある。そして、知つた結果、私はこれ以上地球人のやる事に、加担しようとは思わなくなったのだ。

ブラックホールを解析して正体を白日の下に晒すのは科学者冥利に尽きる。しかし、一方でそれらを利用しようとする輩もある。

歴史は明らかに繰り返していただろうに、未だ地球人類は歴史に学ぶ事をしない。人類は身の丈以上の文明や力を持つてはならないのだよ。

妻は、それを知ってしまったために、ブラックホールの接近データを送信後、船ごとあの向こうへ追いやられたのだ」

血の気が戻らないままの科学者は口角から泡を飛ばして、彼に罵声を浴びせる。

「そんなものは我々の研究になど関係ないではないか！ 我々は純粹にブラックホールのデータを採取しに来ただけなのに、軍艦ならまだしも、科学船まで破壊するとは！ お前は人でなしだ！ 今すぐこの探査船から出てお前だけが死ぬ！」

血走った眼で錯乱状態に陥り、飛びかかってきそうになったので、リュウイチロウは銃のスイッチを押して、彼を永遠にシートから動けないようにするしかなかった。

「さて、このまま私と宛ての無い旅に行くか、いまこの絶望のまま死ぬか。二つに一つだ。科学者は口を開けば研究研究と言うが、ただの自己満足でしかない。しかも残念な事に、私はこの日、この時間のために地球に保管してあるブラックホールの最新データは全て消えるようにプログラムしてある。」

アンドロイド・カリオペのクリスタル・キューブから指示されたAIは、それぞれが艦隊の動力炉の停止や暴走、そして地球のデータ消去を実行した。

私が出るのはここまでだったが、これで暫くは地球のブラックホール研究は停滞する事だろう」

動かなくなつた科学者の隣から、もう一人が尋ねた。

「ヤニ博士は、こ、これから、どうするのだ」

「私か？ 私は……そうだな。ブラックホールへの突入は、妻へも会いに行くことだから……どちらにせよ当初の計画に変更は無い。

ただ……やはり」

妻とのデートに、これだけの人数は必要ないじゃないか……？

「私はこんなに自己中心だったかな」

何の躊躇も無く、次々とリュウイチロウの手元から光線が走って、残り三人は声もなく倒れた。

副操縦席に座っていたアンドロイド・カリオペが振り返る。

『あと十秒ほどです』

静止はしているものの、強く引つ張られる力を感じた。

めまぐるしく、人の命のように、星の生と死が入れ替わる。

未知の世界とは言うものの、これは知ってはならない世界なのかもしれないのだ。

もし、その世界を垣間見たとしても、私は誰にも言う口も言葉も持たないだろうし、言葉にすら形容できないだろう。

その感動と畏怖とを共有できるのは妻だけしか居ないのに。

「私はただ、妻に逢いに行くだけだ」

きつとまだ妻は生きているはず。

地球から見て、このブラックホールのある射手座の方向は、多くの星が集まった銀河系の中心にあたり、その様子からして天を流れる星の川と呼ばれている。

古代から連綿と続いていた星振信仰にまつわる伝説では、年に一度、ゆえなく仲を引き裂かれた恋人達が、川に架かった鳥の橋を渡って逢瀬を楽しむのだという。

いま私は、もはや川と言うより海といったほうが良い広大な流れを渡って、愛する人に会いに行こうとしている。

私は地球よりも、仲間よりも、研究成果よりも、何よりも妻を選んだ。

妻は、あの向こうにきつと生きて、私を待っているはずなのだ。

「カリオペ」

どちらともつかない名を口にした。

アンドロイド・カリオペが体勢を整えた。

『プロジェクト・天の川。^{ガラクシィアス} リュウイチロウ、発進します』
かすかに白い電子の筋の尾を引いて、探査船が静かに定められた
方向へ向かった。

あの広大な光の平原の向こう。

誰も見た事の無い暗黒の、その先へ。

私は愛する人に、逢いに。

この大河を渡って。

【星の海のカリオペ 完】

(後書き)

初短編。

七夕小説企画の長編推敲が息詰まって行き詰ってしまったときに、非常に具合の悪い事に思いついてしまったネタです。

七夕って言ったら天の川じゃーん

天の川って言ったら射手座方向

射手座方向って言ったら銀河系の中心部

そっち行ったらブラックホールに吸い込まれて

ホワイトホールから出ちゃうー><;

と言う連続型妄想に襲われた結果、SFジャンルの卵が生まれました。

渾身の腕力をこめた、マイナージャンルから抵抗のSF七夕。

どうもSFから離れられなかったみたいですが。

と言うか、あの…具合悪いとホントに余計なこと考えるものなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109e/>

星の海のカロオベ

2010年6月22日11時44分発行